

どこまで行ったところで、たどり着くことのできない時刻があり、たどり着けるはずもないのに、既に私たちがそこに含まれてしまっている時刻がある。そばにいるのにどうしても顔の見えない誰かがいて、違う世界に移動してしまっただけなのに、息づかいをすぐそこに感じる誰かがいる。ときとして海底をあらわにする満ち潮が訪れ、絶え間なく言葉を送り込む沈黙が降りる。私たちはそのような場所で生を送り、そのような場所が私たちの中に住んでいる。そこではおそらく、魂の束の間の移動が生み出す影だけが、距離をはかる手だてになり、方向を示唆する道具になる。人々はその移ろいを奇譚(きたん)と呼ぶ。

# 東京奇譚集 村上春樹

FIVE STRANGE TALES FROM TOKYO

41歳のピアノ調律師

——「偶然の旅人」

息子を海で失った女

——「ハナレイ・ベイ」

失踪人を探索するボランティア

——「どこであれそれが見つかりそうな場所で」

「一生で出会う三人の女」のうちの一人と出会った男

——「日々移動する賢國のかたちをした石」

自分の名前だけが思い出せない女

——「品川猿」

東京で静かに暮らす人々が体験する  
五つの奇妙な物語。

待望の最新短篇集！

新潮社

41033144  
©2014 1470円(税別)

http://www.shinchosha.co.jp

ISBN 978-4-10-33144-4